

東京都立国際高等学校 国際理解科目「社会生活」 2021年6月16日(水) 大高 俊一郎 さん オンライン講演会

今日の講演を聞いていちばん印象に残ったのは、桜井哲夫さんが国賠訴訟での証言を決意したときの言葉です。ハンセン病の残酷な法律から時間がたった今、たしかに裁判でその過ちが認められたことは大きなことかもしれませんが、ですがやはり何人の命や人生を、国という権利と、知識をも意味をなさなくなってしまうような負の差別的な感情のみでいとも簡単に奪ってしまったという事実はどんなに裁判が繰り返されようと消えません。それで終わりだと思ってほしくない、というのが桜井さんの言葉の意味だと思いました。今回の講演はもちろん貴重なお話でしたが、逆に私はこの話を決して貴重にははいけな
いと思います。私は高校生になるまでこの話を詳しく知らないまま生きていたことにとてもショックを受けました。中学生の頃の社会の教科書にも、下の小さなスペースに補足的に載っていただけだった思い出があります。私は今とてもそれを疑問に
思っています。国は法を取り消し、過去の過ちを反省するだけで良いのか、そして社会はそれを知らない人ばかりで良いのか
と疑問です。実際、コロナウイルスで差別が起きています。私の知り合いは大阪で働いていて、他の県から通勤している同僚
のお子さんが「親御さんがコロナウイルスが拡大している大阪で働いているから、学校に来ないで欲しい」と言われたそう
です。私はこの話を聞いて、全くハンセン病の時と同じだと思いました。もちろん資料館もあり、当事者や周りの方が懸命に活
動されていますが、私は、もっとこのことを社会が知るべきで、教育を通じてしっかり学ばせるべきだと思います。なぜなら、
この問題はただ過ぎたことではなく、差別についてのことや、生きていく上で学ぶべきことが詰まっているからです。

ハンセン病と聞くと私はいつもドリアン助川さんの「あん」という本を思い出す。この本は若いときにハンセン病を患った
高齢女性の吉井徳江さんがどら焼き専門のお店、「どら春」で仕事をする話である。徳江さんの作るあんが好評で店の売り
上げは良くなったのだが、徳江さんがハンセン病患者だと発覚するとその売り上げは下降していくのだ。この本を初めて読ん
だ時大きな衝撃を受け、すぐに再度読み始めた。当時はハンセン病という名前も聞いたことがなく、過去にこのような出来事
が起っていたことにショックを受けた。この話に出てくる徳江さんの14歳にして家族と縁を切り、ハンセン病患者を隔離
する為の療養所に入所した話は心を締めつけた。「あん」の本に加え、今回の公演や配布された資料からハンセン病の理解を
深められたように思う。だが理解だけでなく、ハンセン病患者に対しかわいそうだと感じてしまう。差別や偏見はマイナスな
発言をぶつけるだけではなく、かわいそうと思うこともハンセン病患者を傷つけているのではないかと思う。家族を守るため
に名前を変えたり、社会から切り離されたりと本来あるはずだった人生が国の誤った対策により、全てが覆ってしまったの
だ。人生の可能性を奪いその人の人生を歪めてしまうから、人権が大切で差別はいけないと今日の講演でもおっしゃって
いた。ハンセン病患者として見るのではなく同じ人間として接していくべきだ。だが、このようなことが繰り返されないよう
ハンセン病にまつわることを語り継いでいくこともまた必要である。

先日のハンセン病のお話を聞いて、国の存在が大きいこと、差別の過酷さを学びました。ハンセン病はただの感染症で治
療できて治せる病気にもかかわらず、患者に対しての差別は激しくひどいもので、国の判断に関して理解ができませんで
した。また、国が良くないものと国民に広げてしまったことで、人々もそれを信じてその差別に流されてしまって、国の影響力
は良い方にも悪い方にも大きいと感じました。私たちが選挙で選んだ国会議員がこのような差別的な政策をこれからしないよ
うに、私たちも自分たちの行動について考える必要があると感じました。また、黒髪小学校のお話は想像を絶するもので、
現実そんなことが起きていることに驚きました。ハンセン病については、事前のビデオだったり、以前に学んだこともあり
ましたが、このような事件が起きていることは知りませんでした。そして黒髪小学校だけでなく、隣の小学校もその子供たち
を受け入れず、他人に押し付けていて、胸が締め付けられるような感情になりました。そのことから中山節夫監督の言葉「差
別は自分のことになったときに姿をあらわす」も納得できるなあと感じました。たしかに当事者にならないとわからないこと
もあり、それでこのようなひどい差別をしてはいけませんが、皆他人事のように感じていたのではないかと思います。今
回のお話を聞いて、自分の語彙力のなさに呆れてしまい同じような言葉を並べてしまいましたが、ハンセン病に対して正し
い知識を持って、習ったことだけ覚えたりするのではなく、そのことに対して自分なりにしっかり考えることが私たちのよ
うな若い人たちがやるべきことだと思いました。また、間違えている知識を全て鵜呑みにするのではなく、それが本当に正しい
のか判断する力が今も必要だと感じました。今回貴重なお話を聞かせてくださってありがとうございました。あまりハンセ
ン病のことを詳しく聞く機会が少ないので、ここで終わりにするのではなく、私たちがハンセン病について多くの人に伝えて
いきたいと思ひます。

今回して下さったお話の中には許せないことや理解ができないことがたくさんあった。江戸時代から、外の目を気にして部屋に隔離されたり、他の患者と物乞いをしたりとすでに差別が行われていたことももちろん悲しいことだが、私は、明治以降、隔離、差別を続けたことに一番鳥肌が立った。日本が列強の仲間入りをしたあと、ハンセン病患者が外に出ていることを政府は恥ずかしいと感じたそうだが、ハンセン病患者という社会的、身体的弱者を強制的に隔離、というより監禁し、差別をしていることをどうして恥ずかしいと思えなかったのか不思議で仕方がない。とはいえ、ハンセン病患者からすると、療養所の外で差別を受けるよりも、療養所の中で自分と同じ病気を持つ患者と生活する方が気持ちの良い部分もあったのかもしれないと思った。しかし、療養所内の劣悪な環境には非常に驚いた。いうことを聞かなかった人を監禁室に閉じ込め、その結果23人の方が凍死または栄養失調で命を落としたことは本当であってはならないことである。第一、ハンセン病患者は悪いことをしたわけではないので、所長が勝手に作ったルールを破ったから罰するという仕組みが理解できない。そして最も理解できなかったのは断種と中絶の話だ。ルールそのものもあってはならないと思うし、手術があるのにお昼休憩に入った看護師やそれが原因で奥さんの中絶手術を旦那さんに手伝わせた医師は何を考えていたんだろうと思った。こういった話を聞いたあとに患者の優しい絵画を見ると政府などにはハンセン病患者をもっと守ってほしかったと思った。

第6回の社会生活の授業は、ハンセン病についてのオンライン講演を聞かせていただきました。既にご覧いただいたパンフレットでハンセン病について少しだけ知識は得たのですが、それ以上に詳しい部分まで教えていただきました。今までハンセン病は名前は聞いたことがあってもあまり興味を持って調べることもなく関わりがなかったので、学ぶのは今回の授業が初めてです。お話のなかで衝撃的だったことをいくつかあげます。まず一つ目に、ハンセン病は薬で治るのになぜまだたくさん療養所に患者さんがいる？というのに対し、入所者の方はもう治っているということです。療養所は病気を治すところなので、治ったら家に帰れるのかと思っていました。ですが治っても既に年を取りすぎていたり、入所時に家族と縁を切ってしまったりで社会に帰る場所がないという現状があることを知りました。二つ目に、以前の療養所は病気を治して社会に戻ってもらうための場所ではなく、「ここで死んでもらう」ための場所という言葉です。たしかに隔離してそうしたらハンセン病はなくなるけれど、一度感染しただけでもう犯罪者のように、それ以上の扱いを受け二度と社会復帰できなくなるシステムをなぜ国はとっていたのだらうと思います。やはり未知の感染症への恐怖のせいだと思うけれど、私たちの今流行っているコロナもよくわからなかったのは同じなので同じように強制隔離の状況になる可能性があったのかと怖くなりました。三つ目に、差別は自分のことになったときに姿を現すということです。第三者から見たら差別はかわいそう！やめよう！と思えますが、実際に自分が当事者になったときに正しい知識を感情に流されず使えるのかが人は私を含めてあやしいと思います。でもそもそも正しい知識をそもそも持っていなかったら感情や恐怖に流されるしかないのだから、学んで身につけていかないと。コロナもメディアの煽りに騙されているのでは、と自分自身を見直そうと思います。ハンセン病の患者さんは苦しい生活の中生きる意味を見出すために、絵画や俳句など創作に励んでいたと聞き、その一つ一つにどんなに強いメッセージ性があるのだらうと思いました。また、スポーツも盛んでゲートボールが全国最強と聞き驚きました。本当は当時の法律で療養所の外に出ることは出来なかったそうですが、社会との自然な交流だと思いました。あまりこの話に関係はないのかもしれないけれど、私はインクルーシブ教育に理由があって否定的で、それならどの地点で交流を持てばいいのかわからず悩んでいました。ですがスポーツや趣味を通じて、障がい者やハンセン病という特別な枠ではなく共通の趣味の中で交流するというのは、障がい者との交流において何か通じるものがあるような気がしました。講演後、お話を伺った大高先生のTwitterを見ました。紹介されていた「開かれた扉」という本が気になったので読んでみようと思います。間違った知識は偏見を助長し、隔離し、差別を引き起こすことが国全体での反省と経験からわかります。だからそれを教訓として現在のコロナ禍で過ちを繰り返したくないと思いました。まず正しい知識を持って、自分がいざ関わる時になったら、デマや恐怖、周りの動きに流されずに教訓に基づく行動を取りたいです。

今までハンセン病については、中学校の頃美術の授業で木下晋さんが描く櫻井哲夫さんの肖像画などを見て学んだことがあったので多少の知識はありました。まず、ハンセン病について先生に教えてもらう前に私が持っていた知識やイメージは、やはり差別問題が大きくありました。療養所に無理矢理隔離されたり、治る病気であるにも関わらず差別的な対応をされていたということを知っていました。今回の講演会でも更にハンセン病患者への差別の酷さを痛感しました。まず驚いたことは、想像以上に差別の歴史が長いということです。明治時代辺りからこういった差別が今でもまだ続いているということに対して衝撃を受けました。さらにこういった差別的な対応を率先して行っていたのが日本の政府であったことにも驚きを隠せません。長い間改善もせず差別を続けてきたり、人権侵害ともいえる行為をたくさん行っていたことを知って、日本でこんなに酷いことがあったなんて、と悲しさも生まれました。そして、今回の講演会で1番印象に残ったことはやはりハンセン病患者の方々の経緯や体験談です。ありえないほどにひどい仕打ちを受けていたことを心情のままに伝えていて胸が苦しくなりま

した。どの話も想像を絶する話ばかりで耳を塞ぎたくなくなりました。今回の講演会を終えて、改めて差別が何かを考え直しました。私自身、今まで差別はいけない。という気持ちは持っていたものの「差別」というもの自体にはすごく無関心であったなと思いました。それは、差別を受けていた人たちの思いや話を実際に聞いたことがあまりなかったからだと思います。差別を心のどこかで他人事に思っていた部分があるあったのかもしれませんが。しかし今回話を聞いて、無関心であることも差別になってしまうのかなと思いました。関心を持つというよりは、差別を受けている人、受けていた人の気持ちを考えたり、話を聞くことによって「差別」を他人事にしないことも大切なことではないのか、と考えました。差別をしていない。と書いていても、心のどこかでモヤモヤしてしまっていることがあったことに今回の講演会で気づきました。これからは、そういった差別を他人事に思わずにしっかりと受け止めて考えて行動したり、話を聞いて行きたいと思いました。そして、差別が無くなるべきであると改めて強く思いました。大高先生へ 今回はお忙しい中講演会を行って下さりありがとうございました。ハンセン病について、差別について改めてよく考えることが出来ました。今まで中途半端な知識しか持っていなかったのですが、今回の講演会でしっかりとハンセン病について学ぶことが出来て良かったです。今後生きていく上で今回の講演会で学んだことを大切にしていきたいと強く思いました。改めて、今回は本当にありがとうございました。沢山のことを学ぶことが出来ました。

今回、ハンセン病についての講演を聞いて、ハンセン病での差別問題で起きた事をしっかり教訓として学んで、これからは活かしていかなければならないなと思いました。実際にハンセン病の歴史について聞いて、こんなに長く続いて苦しんでる人が未だにいるという現実が信じられないと思うくらい、酷いことだと思います。話であった、重症の病人の方を軽傷の病人の方が看病したり、お腹の中にある赤ちゃんまで差別されて被害を受けてしまったりしていた時代があったときに、これはおかしい事だと当事者では無い人達から声が上がらなかったのか、国の仕事をしてる人で1人でも疑問に思う人がいなかったのかとても気になりました。また、宮崎駿監督のもののけ姫のように、今起こっている問題を、みんなが触れやすいアニメという映像媒体で表現するのは、その問題について考える良い機会になるのではないかなと思いました。この表現の仕方はいまのコロナについてもそうだし、ほかの差別問題についてもなどもみんなが触れやすい形にすることでたくさんの人に問題について考えたり、興味を持ってもらったりして、迅速な解決や理解を促進することが出来るのではないかなと思いました。今回のこのハンセン病の差別問題から得た「未知の感染症が流行した時にこのような同じ過ちは繰り返さない」という教訓を、いまのコロナ禍でも守っていくべきだと思います。また、このような話を私たちに伝えに来てくださった大高先生に感謝申し上げます。

今回の授業では、ハンセン病についてお話を伺いました。私が特に衝撃を受けたのが、原田信子さんの父親がハンセン病にかかったことで家族が差別を受け、親に何度も死のうと言われた、というお話です。村の人や患者だけでなく、患者の家族の人生までも狂わせてしまう、差別の残酷さを改めて痛感させられました。国が法律を作り、無頼県運動が行われ、病気を根絶するために患者を隔離するよう呼びかけられてしまったことで、人々の患者とその周りの人たちに対する偏見の目が強まり、著しい差別に変わりました。また、私は治療薬が開発されたあとも法律が改正されずいたことが無念でなりません。法律の改正を求め、声を上げてきた人々に耳を傾けずいた国は沢山の患者やその家族の人生や将来の可能性を奪ってしまったという償いようのない罪があります。国が悪いのはもちろんのことですが、情報を享受する国民にも意識が足りていなかったのだとも私は思います。本当に国の言っていることが正しいのか、ただただ国の言っていることを信じて疑わないのではなく、情報を見極め、これによって 偏見の目に晒されたり、差別を受ける人がいないか考えるべきだったと思います。今の時代でも、人は様々な情報に流されますが、SNS に比べて信憑性の高いテレビのニュースや、ましてや国の情報には無意識のうちに強い信頼を寄せてしまっていることが多いです。だからこそ今の時代でもいつまた偏見や差別につながってしまうような情報が出回るかわかりません。今、私たちはマスメディアの情報を鵜呑みにせず、自分なりに情報を調べて分析し、真偽を確かめることが不可欠だと思います。この過去を2度と繰り返さないためにも、私たちは情報リテラシーを身につけ、偏見や差別から人を守るべきなのだと思います。

先日のハンセン病についての講演では、パンフレットには載っていなかった細かい歴史や今まで知らなかったことをたくさん知ることができました。聞いたお話はどれもたいへん貴重なものでしたが、その中でも私が特に印象的だなと思ったのは黒髪小学校事件です。療養所に入所している親を持つ小学生が黒髪小学校に入学することになり、それに対して黒髪小のPTAが大反対したことで結局一般の児童は自宅で学習することを強いられました。国の隔離政策のせいもあって強い偏見と差別意識を持っていた黒髪小のPTAは、竜田寮側から「ハンセン病は遺伝性の病気ではない」などハンセン病に対する誤解を解くために説得されましたが聞き入れず竜田寮の生徒は各地の施設に引き取られてしまいました。私は、誤った差別意識が根強く

植え付けられてしまったがために正しい情報も信じてもらえずこのような事件が起きてしまったのだと思います。その点で考えれば、私たちは当時よりも容易に正しい情報も間違った情報も拡散することができるので、いとも簡単にこうした差別を繰り返してしまう可能性があるのではないかと感じました。また、その後黒髪小の事件で近隣の小学校は竜田寮の子供たちを入学させてはどうかと提案しますが、黒髪小側が「ならあなたの学校で引き取ってもらえないだろうか」と尋ねるとそれはできないと拒否したそうです。差別は自分のことになった時に姿を表す”という言葉は、本当に的を得ていて心に刺さるものがありました。教訓の中にもありましたが、この一連の出来事が起こってしまった共通の原因は”正しい情報を知ろうとしない無関心さ”と”自分じゃなければ良いという無関心さ”の二つの無関心だと思います。その教訓はこのコロナ禍だけでなく様々な問題に言えることで、無知なまま発言や行動を起こすと大変なことになってしまうということが黒髪小学校事件の例から私が学んだことです。これから社会生活の授業で学ぶ人権問題や差別問題、そして社会に出てからもこの学んだことを忘れないことが大事だと思います。

今回はオンライン授業で大高先生からお話を聞かせていただくことができました。まず、日本のハンセン病の歴史について学んだ。既に江戸時代から流行っていたと聞き、とても驚いた。今とは違い医療技術も発達していないなか、とても大変だったんだろうということが想像できた。江戸時代までの患者の様子として、悪い事をした人が罰としてかかる病気や親から子供に遺伝してかかる病気とみられるとなっていたが、どの理由もかかってしまった人にとっても負担がかかり、罪悪感をなすりつけてしまような言い分だと思った。らい菌の発見から、遺伝病だと考えられていた病気が感染病であることが明らかになり「ハンセン病から社会を守る」という理由で療養所に隔離するなど患者に対するさべつが芽生え始めた。資料に載っていた原田信子さんの体験を読み、もし自分がその立場だったらと思うと本当に辛いと思った。そして保健所の人に来て、部屋の中真っ白になるほど消毒されると書いてあるが、そのせいで近所の人にも知れ渡り噂になり、そこからまた差別が生まれてしまうのではないかと考えた。昔の療養所の暮らしについて、療養所は本来病気や怪我を治す場所のはずが、患者を閉じ込めた監禁室という言葉聞き残酷さを改めて実感した。そしてその場で23人が亡くなったと聞き、そのことが許されないことだと思った。そして、社会の差別は人の人生の可能性を奪い、その人の人生をゆがめてしまうため、人権はとても大切だということを学びました。

今回は、ハンセン病の事について詳しく教えていただきました。私はハンセン病というものを詳しく知らなかったため、とても貴重な時間で、色々なことを知る事ができました。もともとハンセン病は昔から存在していて、その頃からこの病気は、血筋を批判されたり、人の存在を否定されていたという事を知り、昔から差別というものは存在していたという事を知りました。また、この病気に対する偏見をどうにか無くそうとしていた人達が沢山存在するという事を知り、ハンセン病は悪くあるべきでない病気だと考えました。そして、この病気の人たちが苦しんだ1番の原因は国による間違った政策を国民が認めてしまった事だと思います。国は、ハンセン病の人達を何も知らないまま悪者だと認識し、隔離などあってはならない政策を行いました。それを国民は認め、よりヒートアップしてしまったのだと分かりました。そして、隔離されている中でも、病人としては扱ってもらえず、働かされていたと聞いて、この頃の人たちには本当に人権というものが無かったのだと感じました。今になっては、ハンセン病は感染力の極めて弱い病気であることがわかり、差別は減ってはきていますが、いまだに家族との縁が切られてしまったり、普通に働くということが出来てないという事を聞いて、差別というのは一時で終わることではなく、その人の人生を奪ってしまうものだと言うことを深く感じました。このハンセン病の事例はコロナにも通じてくると思います。私たちは全ての情報をうのみにせず、差別や偏見により苦しみ、可能性を奪われてしまう人が生まれないようにしなければならぬと感じました。

今週の授業では、ハンセン病についてのお話を講師の大高俊一郎さんから伺った。ハンセン病患者の方々がおかれていた状況というのは、想像していたよりも厳しく残酷だった。しかし私は、ハンセン病患者の家族、父親が強制収容されてしまった原田信子さんの体験が特に強く印象に残った。彼女は、一人の家族がハンセン病に感染してしまっただけで母親や彼女自身も差別されてしまった。単に関わりを避けられるだけでなく、仕事や学校をやめさせられたり、家を真っ白になるまで消毒されたらしい。これは、「ハンセン病患者の家族だから」という理由だけで行われた人権侵害だ。ハンセン病患者当人たちにもそういう人権を踏みこじめるような行為をされてきたと言うが、それだけには留まらずその家族にも差別をしてきたというのは許されることではない。また、原田さんは、母親の仕事がなくなったことにより生活が貧しくなったそう。それが与える精神的ダメージは大きく、彼女の母親はいつも子どもの原田さんに向かって「死のう、死のう」と言っていたと言う。子どもに向かって心中を訴えかけていたことから、よっぽどその状況が苦しかったことが分かる。ハンセン病による差別は多大な精神的苦痛を人々に引き起こし、最悪の場合死にまで追い詰めさせた。これはある種の人殺しと言っても良いのではないだろう

か。人々の誤った考えにより、ハンセン病患者やその家族までもがその先の人生を制限、消失させられるのだ。私はこのことがもはや人々の目的となっていたことが本当に恐ろしいと思った。彼らは自分のしていることをちゃんと見つめ直し、すぐに行動を改めるべきだったと強く感じる。このように、私はハンセン病の歴史を学ぶことで、ハンセン病という病気が身体的なものだけでなく精神的にも苦しみを与える病気だということが分かった。国や人々が誤った行動をし続ければ、ごく普通の病気も重大な精神病にもなりえるということだ。このような差別は二度と繰り返されてはいけぬ。だからこそ私たちのようなハンセン病についてよく知らない世代は、深く学ぶ必要があると思う。最後になりましたが、今回お話をしてくださりありがとうございました。先日のお話を伺ってハンセン病の歴史から多くの学びを得ることができました。今、このご時世にこの話を聞いてよかったです。

ハンセン病は昔からあったのにも関わらず、薬で治療できることが判明するのにも時間がかかっているし、「らい予防法」が廃止されるのにも、薬治療開始から半世紀以上経っていることは本当に驚いた。このような背景には、国が主体となり、国民にまでも広がったハンセン病患者やその家族に対する差別行為を行ってしまったことが挙げられると思う。ハンセン病と同じ感染症、新型コロナウイルスが流行している現代でも他人事とは思えない出来事だと思った。症状が出ている患者を隔離したり、避けてしまったりすることはまだ理解できるが、症状が改善しているのにも関わらず、人を菌扱いして、差別することはあってはならないことであり、解決していかなければならないことだと思った。未だにハンセン病家族に対する差別についての裁判が行われていることは、今もハンセン病に対する差別がなくなっていない証拠だと思ってしまった。患者を収容する施設の在り方がとても残酷で、人権を侵害しかねず、刑務所との共通点が多いことにも驚いた。国に多くの患者がいるのにも関わらず、社会復帰させることを目指さず、死んでもらうための場所となってしまった収容する施設の在り方を私たちはしっかりと考え、二度とこのようなことが起きないようにしなければならないのだ。中山節夫さんの「差別は自分のことになったときに姿をあらわす。」という言葉は差別の多い現代を生きる私にはすごく胸に響いた。全ての人に認められる世の中を目指そうとは思わないが、少しでも多くの方が生きやすい世の中になればいいなと思った。

もし今ハンセン病が広まっていたとしても昔と同じように、感染者やその周りの方に対して大きな悲しみを生む結果になっていただろう。これがハンセン病の講義を聞いて強く残った印象でした。もちろん、全てが同じ状況になっていただろうとは言いません。今の時代の方が人権に対する意識が確立しているし、科学技術も進化しているため、薬も早期に製造できるようになると思います。しかし、人間の根底にある恐怖という部分は時代など関係なく存在します。私が大きな悲しみは時代を選ばないと考えた理由は、お話ししてくださった原田信子さんの体験にあります。仮に今の時代にハンセン病が広まっていたとしても、感染者やその家族はひどい仕打ちを受けていたと思うからです。その仕打ちは、恐怖から生まれます。理論上ではそういったひどいことをしても無意味ということがわかっているのに、恐怖が論理的な思考回路を絶たせてしまうのです。そのため、中山節夫監督の『科学（正しい知識）が感情に負けてしまった』という言葉が深く心にさざりました。実際に現在でもコロナウイルスの患者やその家族がひどい批判などを浴びるというケースが確認されているように、ハンセン病の場合であっても感染者やその家族は心ない言葉を浴びさせられ、深い悲しみを感じるようになっていたと予想しました。今現象として、コロナウイルスは変異種などもでてきており、全く収容される様子がありません。今でこそまだ多くの人が恐怖に呑み込まれていませんが、この先もっと状況が悪化した場合、何より怖いのが、大勢の人が恐怖により理論的な考え方が出来なくなることです。そうなった時に、ハンセン病で起こったような悲劇がまた繰り返されることのないよう、この悲惨な歴史をしっかりと教養として身につけて適切な行動することが望まれると強く感じました。

ハンセン病について学びました。ハンセン病は私が想像していたよりもずっと昔からありました。ハンセン病から社会を守るという理由で本人の意思と関係なく、患者を療養所に隔離できる法律があり、強制収容されました。これが差別を引き起こす原因となりました。また、感染していないのにもかかわらず、患者の親族も批判の対象となり、心中をなやます人までいたようです。そのため、入所時に家族と縁を切らなければならないこともありました。根絶やしを目指した結果が、人々に恐怖を増やし差別を生むことになりました。間違った国の政策が深刻な差別を生み、多くの人を苦しめました。患者さん同士で結婚はできるようですが、子どもを産むことは許されませんでした。桜井哲夫さんは、その中の1人です。桜井さんの娘さんは、社会の偏見・差別のせいで生きることを許されずホルマリン漬けにされました。これを聞いて私は言葉も出ませんでした。もはや人権がない状態です。誰もおかしいとは思わなかったのでしょうか。患者さんは病気であるだけでも苦しいのに、それ以上の辛い差別や偏見を背負って一生を終えました。こんな酷いことがあって良いのでしょうか。当時と今のコロナ禍は

状況が以ていると思いました。どちらも感染症であり、また、それによる差別が起きている共通点があります。今回のお話を聞いて、この残酷な差別の歴史は絶対に繰り返してはならないとみんなが思ったことでしょう。私は、このお話を聞くまでこんなにも多くの人が苦しんでいることも、ハンセン病の存在さえ知りませんでした。この過ちを繰り返さないように、もっと多くの人がこの事を知るべきです。私たちのように若い世代だけでなく、日本人だけでなく、世界中の人に語り継がれていくべきです。世界には私が知らないだけで、まだまだ色んな形での差別が起きていると思います。それをなくすためには、この問題から目を背けてはならないと感じました。

このハンセン病について考える機会で、私はこの問題は今も他の問題にも通じる場所があると感じました。ハンセン病は感染力が低く、人に移ることも発病することもほとんどなく、現在では薬の服用で治すことができるにも関わらず、まだ偏見があったり多くの人々が真実や詳細を知らなかったりするなど、正しい知識を持たれていないことを知りました。インターネットなどネットワークが発達している現在でもそのように考えられて扱われているため、そのようなネットワークが全く無い時代ではもっと酷かったと分かり、より大変で過酷だったと分かり、収容所での生活やかかってしまった時の周りからの扱いを考えるとどれほど残酷でひどかったのかと思いました。そのような状況での政府の動きはとても重要だったにも関わらず、政府は「先進国」「文明国」になるため、という理由で隔離政策を行ったり、かかってしまった人を社会から排除するような考えを国民に少し洗脳のような形で植え付けていっていったことが最も大きな原因だったとわかりました。また、そのような状況でも政府の考えや政策を鵜呑みにせず、少しでも改善するために研究したり活動することが大切になるのではないかと感じました。さらに、収容所ではハンセン病になっているにも関わらず、重労働などをさせられていて、亡くなった後も隔離されたまま、ということにとっても驚きました。しかし、そのような状況の中でも、生きる意味や生きる楽しさを見つけ、たくさんの作品や芸術を生み出していた人達を知り、凄いと、大切なことであり、そこに救いを求めて、含んでいたことを知って行動することが大切だと感じました。この出来事を、現代で知ること、正しい知識をつけること、そして教訓にして差別をせず正しい行動をすることが大切だと感じました。

今回の講演を通して、私はハンセン病という病気自体は今までに何度かニュース番組を見ていたので知っていた。しかし、その時は私が産まれる何十年も前の病気の話を目撃に感じることができなかった。前回の授業で見たビデオや今回の講演を通して、そのような考えは一切無くなった。今までは、病気は患者とその医療関係の人達だけのものと考えていたが、ハンセン病のように、病気に対する周りの見方や患者に接する態度が大きな影響を及ぼす病気もあるのだと初めて知った。そして、病気による正しい知識と病気の捉え方がどれ程の影響を与えるのかも知ることが出来た。もし自分がハンセン病の患者だったら、またその家族だったらと何度も自分の立場に置き換えて考えた。ハンセン病が感染症だと分かり、その病因が分かっている今だからこそ、ハンセン病患者への偏見や差別はあってはならないものと言えるが、黒髪小学校の事件のように、もし自分がその時代に生まれていて、同じ立場になったら、自分はその差別的な行動をはっきりと否定する事が出来るのかとも考えさせられた。講演でもお話しされていたように、差別は自分のことになった時に姿を表すのだと改めて実感したし、どうして人々の差別的な考えがすぐに無くならなかったのかずっと疑問に思っていたが、その背景には、それぞれの立場になって家族や日常生活が危険に晒されるという不安な気持ちなどがあったのだろうと理解する事が出来た。私達ができることは、このハンセン病の歴史をより多くの人に知ってもらい、二度とこのような誤ちが起きないようにすることだと感じた。

私たちは6月16日の社会生活のオンライン授業で、国立ハンセン病資料館の大高さんからお話をお聞きしました。患者に対しての民衆の対応や思想、政府の対応などハンセン病の歴史を学び、私は思ったことがたくさんありました。私はまず、これらの政府の対応を見て、人権などというものは存在しないと言っているように無視されているなどと思いました。患者にも、その家族にも、発言権も何もかもが奪われているなどと思いました。それは当時まだ今ほど人権思想が薄かったことも知っているのでも、基本的な人権思想と教養は本当に大切なものだなどと強く感じました。また、これらの政策の中には正義ではなく憎しみが含まれているなどと思いました。政策と言うものは、国民の一部を排除するべきものではないと思います。それをこの政策は逆をとっていました。病気というものは、本人たちが意図的にかかるものではありません。このように憎しみを込めてつくられた政策は、あってはならないなどと思いました。その一方で、ハンセン病に関しては医学が発展したことで本当にいろいろなことが証明されて、患者の生活を少しは自由にしたのかなと思いました。ただ私は一つ、本当にショックを受けた事柄がありました。それはハンセン病の方の苦しみは今も続いているということです。ハンセン病の療養所に今もおられる方々は、もう治っておられるのに社会の一員として生活していないということでした。それは経済的な面などでという理由があるのはわかっていますが、もしもっと早く政府が政策を変えていたら、彼らは他の私たち一般市民のように、普通の場所で普通の生活を送られる機会があったのかもしれない。安全面での恐怖で過剰反応してしまったり、排他的な行動をしてしまうのは、

良し悪し関係なく自然なのかもしれません。しかし、それに関しては相手をできるだけ傷つけない方法でやるべきだし、絶対に政策や他人の発言は憎しみの込められたものであってはいけません。これはまさに、コロナ禍でも言えることだと思います。私は、ハンセン病は、差別や感染症など医学的な脅威に関して最も学ぶことの多い事例の一つだと思います。私たちの世代もこれを受け継ぎ、後世に伝えていきたいな、伝えていかなきゃだなと心から思いました。

ハンセン病についてのお話を聞けば聞くほど、私は当時の状況が、現在のコロナウイルスに関する差別と似ているのではないかと強く感じました。もちろん、コロナウイルスの患者さんを隔離することは、感染力が強いという理由があり、ハンセン病の患者さんに対して行われた理不尽な隔離とは異なるし、家族がコロナウイルスに感染した場合に家族全体が外出を控えるよう言われることにも同様の理由があります。しかし、コロナウイルスに感染したこと、またはその疑いがあるとされたことを負い目のように感じ、周囲に知られないほうが良いと考える人は多いのではないのでしょうか。これは、ハンセン病患者が周囲に差別されたように、コロナウイルス感染者も差別される可能性を私たちが感じているからだと思います。感染しても誰もそれを悪く言わないと思っていれば、隠そうという思いはわからないはずです。実際私の周りにも、家族が感染したことを黙っていて、本当に信頼している数人にだけ話すという人が何人もいます。あまりオープンにしないことを悪く言いたくないわけではありません。でも、それを話したら差別されるのではないかと、関係が壊れるのではないかと心配しなければならない社会の状況は、決して良いものではないと思います。ハンセン病だけではなく、過去の病気に対する誤った行動、繰り返してはいけない歴史を、今こそ1人1人が考え直すべきだと思います。また私は、前回に引き続き今回も、自分自身のハンセン病に関する知識の少なさを実感させられました。療養所での劣悪な生活環境や、亡くなってもなお隔離され続けるという状況が、私だけでなく世間全体にあまり知られていないのではないかと思います。私はこの社会生活の授業で学ぶ機会を得ることができましたが、もしこの授業がなかったらこの先もずっと、ハンセン病という病気が昔あって、隔離が行われていたという程度の知識しか持たずにいたと思います。社会生活をとっていない子は、今ほとんどハンセン病について知らないかもしれません。学ぶ機会があった私が行動を起こし、ハンセン病について少しでも興味を持ってもらえるきっかけを作れたらいいなと思います。

今回の授業では、ハンセン病の実態、影響、そしてそこから私たちが学べる教訓について、国立ハンセン病資料館の大高俊一郎さんのお話を伺った。私が今回の講義を聞いて一番考えたのは、人権の不可欠性である。お話の中に、桜井哲夫さんの一生についてあったが、彼に存在していた人権とは、私がつけているものとは大きくかけ離れていた。彼は、自らの子を中絶しなければならぬ状況に置かれ、妻子とともに豊かな人生を歩むことを許されなかった。ハンセン病にさえかかっていたいなければ、彼は素晴らしい人生を送ることができたはずだ。しかし国の間違った差別や偏見、そしてハンセン病への対応は、ある一人の家族の人生を崩してしまった。これは一人が人生をおくる過程において、あってはならないことだと思う。どんな病気をもっていても、最低限の人権は尊重されるべきであり、それは不可侵である。人権とは、すべて国民がもつものであり、他者によって影響されてはいけないことを学んだ。私は加えて、無意識に起きてしまう差別についても考えた。「差別は、自分のことになったときに姿を現す。」中山節夫さんの言葉だ。ハンセン病について学ぶときには必ず、差別の話が現れる。私は人生で差別というものを経験したことがないが、差別がいかに残酷で醜悪か、情報を通じて知っている。しかし、この言葉が示す通り、いくら自分では差別はいけないことだと認識していても、自分のことになったら無意識にしてしまうかもしれない。実際にそういった経験がない今だからこそ、私は無意識のうちに起きてしまう差別を止める努力ができるのではないかと感じた。

私が今回ハンセン病患者が強いられていた境遇について知り一番思ったのが、入管問題に似ているということだった。私はボランティア団体で入管施設の被収容者に対する支援を行っている。そこでは面会活動だけでなく、問題の存在を世間に知ってもらえるようSNS等における広報活動にも力を入れている。現在における入管施設は、近代以降(明治時代中盤)の日本におけるハンセン病患者隔離療養施設とほとんど同じだ。国によって刷り込まれたイメージが人びとの根底に根付いて、差別として表面に出ている。私はもらった資料で予習しているときにこのことに気が付いたが、ふと、この時代にこの隔離政策を問題視していた人は本当に全くなかったのか疑問に思い、講演中に質問した。講演者の方は、確かに支援団体はあったが、一部の宗教団体であり、あくまでも慈善活動として行われていたのだと答えてくださった。それは多くの人々がこの問題を知っていたにも関わらず、行動を起こさなかった、また一部の人がどんなに問題の所在を主張しても影響力がほぼなかったことを意味する。新型コロナウイルスで私たちが過去の過ちを繰り返さないために必要なのは、一人一人が発言する力、行動する力だと思う。幸い今の私たちにはSNSという全世界に情報を発信できる強いツールがある。しかしそれも使い方を間違えれば差別を助長する結果になりかねないし、世間に偏見をより深く植え付けてしまう可能性もある。それを防ぐには、講演中先生

が何度もおっしゃったように正しい知識を持つことが必要で、私たちにはそのための努力が求められる。ハンセン病は江戸時代から続く偏見だったという。私たちが当たり前に見ているものの中に誤りはないか、差別の種はないか、常に疑って生きることが大切だと感じた。

国立ハンセン病資料館の方からお話を伺い、日本に紛れもなく存在した、そして今もお多くのハンセン病患者さんを苦しめている偏見、差別の残酷さを実感した。私が1番印象に残ったのは、「自分が死んだらお父さんとお母さんと同じお墓に入って、親子3人で仲良く暮らしたい。」という言葉だ。実際にハンセン病による偏見、差別に苦しめられてきた方がおっしゃったこの言葉にはこのハンセン病問題の残酷さ、本質があるように感じた。国の間違った政策、そして世間の偏見、差別がなければ、こんなにも辛い言葉は要らなかっただろう。たくさんの差別に振り回され、苦しい思いをして、その上生きている間にはたったひとつの、ハンセン病問題がなければ容易に叶ったかもしれない願いさえも叶わず、お墓で一緒に暮らせるかどうかさえもわからない。この言葉がもつハンセン病問題の背景を学び、間違った知識、それによる偏見、そして偏見が生み出す差別を間近で見たように感じた。そして、この問題を引き起こした大きな要因が政府の誤った、人権を無視したような政策だということから、私たちは現代、このコロナ禍で再び同じように政府が誤った政策をとらないように監視する義務があると強く感じた。また、新型コロナウイルスの一連の騒動のなかでも、特に未知のウイルスが入ってきた、とだけ報道されていた頃は正確な情報がないまま、感染者は強制隔離をしろ、という声が上がったり、感染者が出た家に嫌がらせをしたりなど多くの問題が発生していた。ハンセン病問題を学んでから、改めてあの状況を思い返すと、ハンセン病問題のような悲惨な結果になる寸前まで来ていたのではないかと思い、恐ろしく感じた。それと共に、やはり歴史から繰り返し繰り返し学び、知識をつけ、自分がその状況に陥ったときどんな行動をとるだろうか？と自分ごととして捉える必要性を感じた。私も今回ハンセン病について学ぶことがなければ、今まさに起こっている新型コロナウイルス流行が偏見や差別を生んだ結果歩みうる未来を想像もしなかったと思う。ハンセン病問題を学び、起こりうる恐ろしい結末を知った今、私は現代の問題が悲惨な一途を辿らぬよう、このことを少しずつでも他の人に知ってもらおう努力をしたいと思う。現代社会にも通ずることが多く、改めて人権、そして偏見、差別について考えることができました。貴重な講演をありがとうございました。

ハンセン病の講演を聞いて、本当にたくさんのことを学びました。比較的最近の話だと思っていたハンセン病問題ですが、江戸時代より前からあったことは知りませんでした。「一遍聖絵」は鎌倉時代の様子を描いた絵ですが、顔の変形を隠すために布を巻き、お寺の門前で物乞いをしている様子を見て、「ハンセン病」という病名がなくてもその症状に苦しんでいた人々がいたのだなと思いました。1931年に「ハンセン病から社会を守る」ためにハンセン病患者を強制的に療養所に隔離できるように法律を改正しましたが、果たしてそれは社会を守っているのだろうか疑問に思いました。法律を改正したことにより国民の間で間違った認識が広がることになり、何よりハンセン病による差別を引き起こすことになりました。社会を守るどころか、ハンセン病患者やその家族とそうでない人とを分断していたように思えます。原田信子さんの体験を読んでどれほど怖く、辛かっただろうかと、改めてハンセン病の差別がもたらした被害の大きさを感じました。病人を治療したり回復のために使ったりするのはずの療養所が刑務所のように、患者は囚人のように扱われ、働かせられたりしたことも酷い話だと思いました。十分に治療することもできず、一度入居したら出られないというのはむしろ刑務所よりも残酷だなと感じました。もし今流行している新型コロナウイルスがハンセン病のように強制隔離や患者の労働があったとしたらとても怖いと思います。家族が感染したら隔離され、残された家族は酷い差別を受け、学校に行くこともできず、最終的に家族と縁を切って1人寂しくお墓に入るということを自分に置き換えると本当に恐ろしいです。しかしそのような体験を実際にしたハンセン病患者がいました。その事実が辛いです。私たちに今できることは、誤った情報に翻弄されないこと、差別をしないこと、幸せに生きていることを当たり前と思わずに感謝することだと思いました。ハンセン病の講演を聞くことができて、自分の知識や視野を広げることに繋がったと思います。お忙しい中、講演を行って下さりありがとうございました。

今回は国立ハンセン病資料館の大高俊一郎先生にオンラインでハンセン病についての講義をしていただいた。自分の全く知らないことを新しく学べる機会だった。ハンセン病は詳しく聞いたことがなかったし、聞いても正直どこか自分からは遠い感じがしてしまっていた。しかし、今のコロナ禍と比べた時に身近なことに感じることができた。なぜなら、時代が違えど今のコロナの状況がハンセン病の状況に似ていると思ったからだ。未知な病気が流行り始め、正しい対処の仕方が分からず、感染を恐れて隔離や距離を置こうとする。そこから、差別や偏見が生まれる。ハンセン病ほどでなくとも、コロナでもそういった現象は実際に起きていたし、差別などに対する関心が広がりつつある今でさえ国内外で問題を起こしている。ただ、大きく違うのは政府の対応や社会の動きで、それは時代の変化が大きいと思った。ハンセン病が多くの人を苦しめた原因の一つは誤った政府の対応だと学んだが、コロナについては政府は差別をしまわぬように対応していた。そこから、国の影響力を強

く感じたし、正しい情報がどれだけ大切なのかを知ることができた。もしかしたら今のコロナの状況がハンセン病の時のような状態を招いていたかもしれない。病気のことだけではないが、常に正しい情報を求め、正しく理解し、自分から知ろうとすることが大切だと強く思った。そして、ハンセン病で苦しい生活を送った人がいる限り、忘れてはならないし、繰り返してはいけない。だからこそ、他にも過去にあったことを学びたいと思える講義だった。大高先生、お忙しい中たくさんの大切な事を教えてくださりありがとうございました。

ハンセン病のオンライン授業ではたくさんの衝撃的なことを学びました。最初にハンセン病の歴史について説明をいただいて、もののけ姫とハンセン病が関わりがあると知って驚きました。私はもののけ姫がジブリ映画の中で一番好きなのでこのことを知らなかったのが少し残念でした。宮崎駿監督はもののけ姫の中のエボシ御前のようにハンセン病の患者を受け入れてみんなが社会の一員となるような社会ができればいいという思いを込めてこの物語にハンセン病の患者を入れたのだと思いました。私が一番ハンセン病で恐ろしいと思ったのは患者自身もちろんですが、家族も影響されるということです。感染した患者自身は家族と縁を切られて離れ離れにさせられるし、家族も近所などの人に嫌な目で見られたり差別されたりするのは本当に聞いて怖いと思いました。その中でも一番恐ろしいのは子孫を残さないことだと思います。地球に新たな命を生み出す能力を奪われ、妊娠してもその子供の未来を奪って家族として一緒に平和に暮らさせないということを聞いて私は本当に人権も何もないじゃんって思いました。オンライン授業ではたくさんのことが学べたので博物館にも訪れてみたいと思いました。

今回は大高さんにハンセン病のことに関して講義をしてもらいました。私は最初ハンセン病という名を聞いた時、あまり頭にピンときませんでした。しかし今は、治る病気なのに、間違った情報で偏見と差別を生み、患者の人権をほぼ奪い、患者にとって過酷な生活を生み出した感染症だということを学びました。ハンセン病の患者が屋外で生活しているのを恥ずかしいことだと当時の人は考え最初は住む家がない患者を療養所に隔離するという法律を作りました。1931年にはハンセン病から社会を守るという理由で患者本人が拒否しても強制的に隔離できるように法律を改正しました。私はこれを聞いてコロナの隔離にも似ていると感じました。しかし当時の強制収容する様子を書いた文は私が想像もしていなかったほど過酷でした。また、昔の療養所は病気を治して社会にもどっていくための場所ではなくここで死んでもらうための場。監禁室があったり、患者は仕事もされていません。違った情報を国が広めたおかげで、患者は周りの人々からは白い目で見られ、差別され、罪も何も悪いことはしていないのに残酷だと感じました。また、プロミンという薬ができたのにらい予防法が無くなったのには半世紀もかかったことに私は、とても疑問に思いました。しかしそれは本当に薬が効くか分からなかったことや、患者さん自身がらい予防法がなくなったら療養所なくなるため、元の生活に戻れるかや差別される可能性への不安を抱いてしまうと言った理由があったからだ聞いてびっくりしました。また、子供たちは学習権を取られ、女性の人は出産ができなく、中絶手術を受けなければいけない事を聞いた時、なぜこのようなことをされなくてははいけないのか心が怒りで溢れました。ハンセン病のようにならないように、一つの情報で判断はしなくてはいけない。正しい知識と情報で行動することが大切だという事に気がつきました。大高さん、今回は貴重な時間をいただき、そして、わかりやすく興味深い講義をしていただき本当にありがとうございました。ハンセン病のことをより一層知ることができ、とても勉強になる講義でした。

ハンセン病について知れば知るほどなぜこのようなことが起きてしまったのかどうにかすることはできなかったのかと考えさせられる。ハンセン病患者はもちろんのこと、家族も差別を受けてしまう状況であったことは一言に言えば最悪だったと思う。今回の授業や前回の動画でもハンセン病患者が施設で受けたことなどを紹介して下さり、その中で自分や家族が病気にかかるという話があったという話があったが、実際にどういういじめを受けていたのか紹介はされなかった。つまり、それ以上に酷いことを受けていて、それを教えているため、いじめについて教えることは少ないのかなと感じた。また、施設内でも刑務所のような扱いを受けていて、人権侵害どころではない状況であった。ドイツのユダヤ人迫害のように共通の敵がいると人は団結できる。それが昔の日本でも起きていたと考えると辛い気持ちになる。法律が改正されたのも最近であり、最近でもまだハンセン病に対する差別が起きているのも現状である。それはやはり、ハンセン病に対してしっかりと知識がないからだと思う。実際に母にハンセン病について聞いてみると名前しか知らないレベルで全然知らないと言っていた。無関心もまた差別につながる。数え切れないほどの不当な扱いを受けてきたその事実とハンセン病はどのような病気であるのかをもっと多くの人に伝えていくべきだと思う。今回習ったことをこれから私からでも他の人に伝えていけるようにしっかりと知識を身につけていきたい。

今回の社会生活の授業では、国立ハンセン病資料館の学芸員であり、ハンセン病について研究されている大高先生から、オンラインミーティングを通してお話を聞くことができた。私が生まれた頃には、もうすでに報道などでも取り扱われなくなっ

たことがあり、名前しか聞くことがなかった病気であったが、今回の授業を通して様々なことを考えさせられた。まず初めに、感染した患者に対してまるで刑務所に収容されている囚人かのような扱いを、国や職員がしていたことに非常に驚いた。コロナウイルスの感染拡大でもあったように、なんらかの差別的な考えを持つ人々がたくさんいたことは予測していたが、しかし国までもがそれを黙認し、ましてや国が主体となって積極的に差別化を図ろうとしていたことは、非常に衝撃的だった。ここで具体例を一つ挙げると、施設で生活していた人々は、病人であるにもかかわらず、労働を課せられることもあり、また施設での行いがよくなると、まさに牢獄のような場所に監禁させられるようなこともあった。このことは、今となれば考えられないことだが、約数十年前には行われていたと考えると、非常に胸が締め付けられる。しかし、この世な時代の中で差別を黙認しようとせず、彼らを助けようとした人々もいたのだということは、大きな尊敬に値すると考える。これほど大掛かりで差別化が進められているので、もしかしたら彼らを容認する人間も差別の対象とされたかもしれないのに、にもかかわらず医師達のように治療にあっていた人々は、強い正義感の元に行っていたとのことなので、そのような人々がいたと知った時はとても嬉しいと感じた。現在、新型コロナウイルスの感染拡大の影響は大変大きなものである。ハンセン病から学び、あのような残酷な事態を起こさないように、国民一人ひとりが気をつけられることがあると考えた。

無知が差別を生み、それをどんどん深刻なものにしていきます。ハンセン病はこのことを強く証明した出来事のひとつであったと思います。19世紀後半の、ハンセン病はとても強い感染力を持ち、感染すると治らない恐ろしい伝染病だと考えられていたころの認識とは全く違い、本当は、ハンセン病は感染しにくい病気でも発病はまれな病気でした。それなのに、関わらずひどい偏見や差別を生むようになったのは、ハンセン病を知ろうとしなかったからだと思います。そして患者は強制的に療養所に収容され、家族も名前も自由も失います。療養所の劣悪な環境の中でこれまでになくなった人の数は25000人にも上ります。治る病気であるハンセン病の患者が、療養所という場所でこんなにも多くの方が亡くなられているのは普通のことではないように感じます。現在ハンセン病患者は1000人を切っているとみられていて、ハンセン病患者が0人となる日も遠くはないと思います。もしハンセン病患者が0人となっても、ハンセン病問題を終わりにしてはいけません、この歴史を消してはなりません。だからこそ、今、ハンセン病を経験し社会からの差別に苦しんだ人々に対して直接動くことが可能なこの世界で、ハンセン病問題を深く考え、行動を起こしていく必要があると思うのです。ハンセン病に対する偏見や差別が残るまま、患者の方々の人権が侵されたままではそれを見過ごしてはいけません、すべてのハンセン病患者が失った人権を取り戻す必要があると思います。

ハンセン病、それは“らい菌に感染することで起こる病気で、主に手足の末梢神経が麻痺すると、汗が出なくなったり、熱や痛みを感じなくなる”病気だと『知って欲しいハンセン病のこと。』国立ハンセン病資料館のパンフレットの書かれています。これを知り、患者の写真を見たときに、どんなに辛い病気なのかを知りました。講演で見た写真では、患者の人々目、首、手足などに包帯が巻かれていて、ほとんどの患者さんの手は一つになっていました。とても辛そう、大変そう、だと私は思いました。ですがハンセン病の患者の人々はこれ以外に、差別などで非常に苦しい人生を送ったそうです。まず初めに、奈良時代から回っていたらい菌、江戸時代まではハンセン病の患者は家を出ずに、小屋や、部屋で隔離されていました。当時描かれた絵、いっぺんひじりえを見れば、ハンセン病の患者が背景に描かれています。彼らは白い覆面を被り、お寺の門の前で物乞いをしている様子から、苦しい生活をしているし、患者であると言うのに、放置されているのがわかります。この様子を私は見て、びっくりしました。患者であり、病気を持っているにもかかわらず、病院に入れなく、布団で寝れなく、物乞いをしている人がいることがとても申し訳なく、かわいそうだと思いました。この頃の医者は何をしていたのか、国は何をしていたのか知りたかったです。明治時代になって、らい菌が発見された後も彼らの苦しい生活は変わらず、「ハンセン病の患者は『恥ずかしいこと』」と国が言ったぐらいです。そして、昭和時代になった頃には、国からの絶対隔離の法律も出ました。原田さんの経験のように、患者のもの全てを真っ白になるまで消毒。まるでバイ菌のようです。私はこれを聞いた時、今のコロナ禍と少し似ているのかもしれない、と思いました。今、コロナウイルスの患者は完全隔離です。しかも、外国から来る人たちも、PCR検査を受けた人々も完全隔離します。最近、母の友達が外国から日本に来たときの話を聞いた時、「隔離される部屋に行くときは、スタッフの人から何も触らないでください、と何度も言われ、まるでバイ菌扱いだった」と言っていました。このことから、新しい病気に対する国の対応はどんなに歳を重ねても、あまり変わらないのかもしれないと私は思いました。らい菌、ハンセン病の薬ができ、治る病気になった頃でも、まだ差別や隔離は続きました。隔離、療養所；患者を閉じ込め、プライバシーもなく、患者作業が行われていた場所、ハンセン病の患者、またその家族に対する偏見、差別；バイキン扱い、患者の子供の学校の拒否、家族との切れた縁、などを見ていると、辛い病気そのものはあまり辛く無くなってきそうです。病気で、手や目が使えないことより、差別の辛さが患者さんとその家族を一番苦しめたと思います。このことから、物理的に痛い痛みより、感情的に痛い痛みの方が100倍に痛いかもしれないと私は思いました。これらを基準に、差別の辛

さ、悲しみを思い知って、感情的に苦しんでいる人々を助けられる人になりたいと思いました。療養所で暮らす人々は辛い困難と生き延びて、今では前向きに暮らしていけているのが、感心します。私は今、歴史を繰り返そうとしているコロナウィルスの影響が次の差別問題にならないことを願います。人々がハンセン病問題から学べたら良いなと願います。

私は今回のハンセン病のお話を聞いて、感染症より人間の方が怖いと感じました。なぜなら、ハンセン病の病状は確かに大変だけれど、歴史の中でハンセン病患者の方が苦しめられてきたのは、病状よりも周りの人からの差別や嫌がらせによるものが多く、それらがなかったらハンセン病患者がここまで追い詰められることにはならなかったと思うからです。私は今回の話の中で強く心に残った言葉があります。それは、差別は自分のことになったときに初めて姿を現すという言葉です。確かに自分の問題でなければなんとでも言うことができるし、効率的にモラル的に正しい選択ができるかもしれません。ですが、それは本人の意思、人の気持ちを無視してしまっていることが少なくないと思うからです。そして、自分事になり、姿を現したときに差別をしないためには、常に偏見を持たないように当たり前の事でも疑ってかかることや、正しい知識を持つことが大事だと思います。私が今回のお話の中で1番驚いた事は、ハンセン病患者の療養所と刑務所に類似点が多くあったことです。患者に仕事をさせるだけでなく、ときには1人の人間の権限で罰を与えることができるシステムは本当に恐ろしいと思いました。ハンセン病について今は多くの情報が出回っていますが、まだまだ知りたいことも多くあり、センシティブな人権問題なので誰に聞いたらいいかかわからないことも多くありましたが、私たちの質問すべてに丁寧に答えて下さり、正しい理解をさせてくださり、本当にありがとうございました。

今回の授業ではハンセン病とその差別の歴史について学んだ。そして私は講義を通して正しい知識を持つことの大切さを改めて感じた。差別が生まれる理由として無知ということが1番大きいと思う。その病気のことを熟知し、理解していなければ漠然とした不安が生まれ自分と切り離したくなる。そのため知識を持つことが大切だと思った。しかし科学技術が発達で病気を理解できない時は自分を守るべきかもしれないし、誰でも本能的に患者から避けようとすると思う。だけれども、ハンセン病の差別は病気の理解が可能になってからも続いた。当時の無知な人から見たら変形した人々は得体の知れない怖いものだったのかもしれないが人々がより正しい知識を持っていれば差別は少なくなっていたと思う。また、質問でも出たように、当時は園内の状態を伝えようとしている人がいたことを知った。その人たちのおかげで園内の状態が明らかになっているがもしブラックボックスとなっていたらますます不安が大きくなるはずである。(見えない不安が1番怖いと思う)なので、人々の理解を深めるために現状を正しく伝える人の大切さを改めて感じた。そして心に残った言葉として『正しく新しい知識を身につけることが必要』というのがあった。正しい知識を身につけるということは、単に知識を得るのではなく最新の正しい情報を得ることなのだなと思った。講義を通してこれらのことを考えたが、もしハンセン病のような病気がもう一度流行っても、自分の身の回りが危険になるまでは関係ないと感じ、知識を得ようと思わない人がほとんどなのではないかと思う。だからこそ人々が日常的に見るテレビやSNSなどで間違った情報を少なくするメディアの向上が必要だと思う。個人的には『新しく正しい知識』を得る意識を持って生活していきたいと思った。

原田信子さんの体験として、父親がハンセン病患者として療養所に連れていかれたことが近所に広まったことや部屋中が真っ白になるほどの消毒によって、苦しい生活が続いた中お母さんが何度も口にした「死のう、死のう、死のう」という言葉がすごく心に残りました。普通、どんな親でも子供には死んでほしくなくて長生きしてほしいはずですが、そんな母親が子供に向かってこの言葉を繰り返すくらい、生きているよりも死んだほうがましなくらい、辛く苦しい状況だったんだなと思い、この言葉だけでハンセン病問題の悲惨さが強く伝わってきました。また、密告などをさせて粗捜しをし、患者を見つけるとは療養所へ連れていき、回避・追放・隔離をすすんで行く無らい県運動は、今でいう“いじめ”と同じだと思いました。しかし、黒髪小学校の事件について「差別とは自分のことになったときに姿をあらわす」という言葉を聞いて私は少しドキッとしました。今、第三者側であるから差別を差別と感じ、正しい行動が何か分かるけれど、もし当時と同じ状況にいたら私もみんなに合わせて間違った行動をとっていたかもしれないと思ったからです。ハンセン病問題は、国による対策が間違っていたのはもちろんですが、その対策に従い周りに合わせて間違った行動をした人びとがいたからこそ、これまで大きなハンセン病の患者さんやその家族に人生被害を与えてしまったと思います。このことを今回の講演で学ぶことができてから、わたしもこれから正しい知識をもって正しい行動ができるように今起きているコロナウイルスについてももっと学ばなければいけないなと思いました。私たちに講演をしてくださりありがとうございました。

今回オンラインでハンセン病に関するお話を聞いて、自分の中でたくさん刺激を受けました。なんとなくハンセン病は感染症だということは知っていましたが、ハンセン病に感染した事で受けた差別、隔離、療養所での暮らしを聞いてあまりの酷さ

に言葉が出ませんでした。確かに感染症に感染しないための対策は必要だと思いますが、だからといって患者を療養所に強制隔離したり、ハンセン病患者は社会にいないと勝手に判断して警察が見つけ出し、療養所に送ることは何ひとつも正しいことではありません。たとえ自分が感染していなくても自分の家族が感染した場合、学校でも町でも差別を受け苦しい生活を長年送ったと言う話もありました。これらは偏見から生まれた差別なのではないかと私は考えます。また、病気が治っていても以前は感染していた、体が不自由で後遺症があるなどの理由で感染していた時と変わりなくずっと差別を受けてきた人が多数でした。このように、大高先生の話聞いて私が1番感じたことは、今生きている人達にハンセン病についてもっと知ってもらう必要があると思いました。正直私も授業でこの内容に触れていなかったら大人になってもほぼ無知識のまま人生を送っていたと思います。ハンセン病についての知識がなかったら日本社会で生きていけないことはありませんが、ハンセン病患者が受けた差別は無かったことになってしまいます。これから差別のない日本社会を作るためにも、多くの人にハンセン病について知ってもらうことが重要だと思います。その為にはまず私たちがしっかりと理解し、私たちが実際に行動に移す事が大切だと思います。

まず講演会を聞いて、印象に残ったところがいくつかあります。一つが、国とハンセン病患者の関係性についての記述です。大きな力を保持している国家権力は、その力ゆえの暴走が予想でき、それを防ぐために司法が存在している。しかしその権力はハンセン病患者という特定の人々の人生に対して取り返しのつかない被害を与えるという、間違っただけの使い方をされてしまった。ここで重要だったのが国家が公にその間違いを認めたという事実です。「国家は間違いを犯す」という当然ながらも、現代の私たちでも潜在的に「国が言うのだから」と思うところ強いインパクトを与えたのだと思います。これは今まで考えたことがなかった観点だったので印象に残りました。もう一つが黒髪小学校事件です。「差別は自分のことになったときに姿をあらわす」「科学が感情に負けてしまった」という言葉は感心するだけでなくこれからずっと考えていかなければいけない事のように思えました。信憑性のない情報、科学的根拠に基づいていない情報、だとしてももっともらしいことを書き並べれば人々を不安に陥れるには十分です。正しい知識を持ち合わせていなかったり、またその知識に確たる自信が持てなかったりするとなおさらです。これは世界で起こる様々な事象に対する憶測やフェイクニュースについても言えます。しかし、ハンセン病はそれに加えて国までもがその混乱や恐怖を後押しするような行動をとっていました。今の私たちの時代は常に錯乱した情報と隣り合わせであり、その情報の中から自分の立ち位置を見極めたり、信用に足る情報を見つけ出したりする力が一般に求められます。しかし簡単なことではありません。この事件が起きたときは、小学生でさえメディアリテラシーを教えられる今日とはまた違った状況であったことは確かです。人々が必要としていたのは不安を徹底的に取り除くこと。でも本当に必要だったのは知識の普遍化と社会全体の認識の改善だったのではないのでしょうか。今回の講演のように私たちの世代が国が抱える問題に関して様々な観点からの話を聞き、そしてその話を自分の中で熟考できる機会を持てることはとても意味のあることだと思います。きっと問題解決に向かうための小さくても重要な一歩のはずだと思います。今回の講演では貴重なお話の数々、教科書を読むだけでは得られない体験をさせていただきありがとうございました。

今回の講演ではハンセン病について学びました。今まで自分の中にあるハンセン病の知識は教科書程度のものでしたが、今回の講演を聞いて深く知ることができ、とてもためになりました。ありがとうございました。特に印象に残っているお話は、「もののけ姫」についてと昔の療養所についてです。自分が何気なく楽しんで見るジブリ映画の一つであるもののけ姫にハンセン病患者が登場していることを初めて知り、驚くと同時に主人公が苦しみながら立ち上がる姿だけでなく、ほかのキャラクターが難病と闘いながら一生懸命生きる姿が描かれているということに心を打たれました。アニメの世界は何かと他人事のように感じる事が多いのですが、もののけ姫は闘病生活をしている人々の姿を描くことで現実味を出し、現代に生きる私たちに何かメッセージを投げかけているようにも思えました。次にもののけ姫を見る機会があれば、タタラ場のシーンに注目して見てみたいと思います。また昔の療養所についてのお話では、大高さんがおっしゃっていたように刑務所のイメージが一番に浮かび上がってきました。お話を聞く前の段階では、療養所では隔離されながらもある程度は良い暮らしができていたのではないかと考えていたのですが、自分の考えが間違っていたことにすぐに気が付きました。強制隔離、監禁室の存在、資金不足を補うための労働、一つの部屋で大勢が生活するなどの話を聞いてまさに刑務所を思い浮かべました。刑務所に存在する、懲罰房、刑務作業等を連想したからです。表現方法が違うだけでまるで受刑者のようなひどい生活を強いられていたということにとても驚きました。また、国の間違っただけでこんなにも人の人生を狂わせてしまうことがよくわかりました。国が言ったことは必ず正しいと過信せず、国民一人一人が情報をいくつも見比べ、自分の頭で何をすべきか、何を信じるべきか判断することが重要であると考えました。

今回ハンセン病の授業を受けて一番に、いくら科学が発展し、治る病気と発表されていても、人々の勝手な思い込みや偏見によって「人里から隔離する政策」が近代に渡って実施されていた事実に対して、私は本当に残念だと感じた。このようなところが日本での現状であり、現在も同じことを繰り返そうとしているのが日本の社会であるのではないだろうか。また、療養所に強制的に入所させられてしまった人たちは高齢化が進み、社会復帰もままならないまま生活を送っているのに対して、先生もおっしゃっていたが、日本の憲法に反することをしたことでハンセン病患者の人たちが満足な生活を過去も、そして今も送っていないのは責任を取れないことなのではないかと思った。加えてこのような事例は日本でも多くあったのではないかと私は考える。例えば「公害」に対しても被害者に対して偏見を持ったり、「感染してしまうのではないか」などと思って近づかないようにする、などや、昔不治の病とも言われていた「結核」に対しても、患者さんを人里離れた山奥に隔離し、「療養」として健康者と患者を分けていたことなどである。日本内ではハンセン病の事例だけでなく同じ過ちを何度も何度も繰り返してしまっている。もちろん今でも新型コロナウイルスに感染してしまった人が家庭内で出てしまったときに、近所の人たちから嫌がらせを受けたり、近づかないようにされてしまったりしている。これらは昔からずっと続いている問題であり、私達が本当に考えなくてはならない問題なのではないだろうか。完全になくすことは難しいが一人でもこの現状を理解することが大切なのではないか。この授業を通じて、自分が考えていたよりも過酷な状況があったことを理解できたのはすごく良い経験だったと思う。

日本では、一時ハンセン病が流行していた時期がありましたが、その当時はこの病気を治療する方法がなかったため、人々はこの病気にかかった人の外観と感染の恐怖によってハンセン病患者を差別し、患者の人権が大きく侵害されました。国の政府はハンセン病患者が外で生活していることを「恥ずかしいこと」と考え、1907年に法律を制定し、住む家のない患者を療養院に隔離する仕事を始めました。その後はハンセン病から社会を守るという理由で患者を強制的に療養所に隔離させることができるよう法を改正し、国は「恐ろしい伝染病」という間違った考えを広め「絶対隔離」を実現しようとした。このような国の政策によって、国民はハンセン病患者を避け、差別し、ハンセン病患者は困難な状況に置かれており、差別するだけの社会の中で生きていかなければなりません。戦後すぐの時期に日本はハンセン病を治療できる薬が流入し、ハンセン病はそれ以上治療法のない病気ではないにもかかわらず、ハンセン病患者を隔離する法律を無くさず、患者たちの隔離解除の要求も聞き入れませんでした。そして1996年、いよいよ予防法は廃止され、その後その予防法が日本国の法に違反する人権を無視した法律として認められるようになります。病気の恐怖によって作られた人権を無視する法律が作られ、その法律によって多くの人々が差別の苦痛の中で暮らさなければならなかったのです。もちろん、国としてはそれが国の責任だと認めますが、彼らの受けた傷と苦痛は取り返しがつかないでしょう。このようなことが二度と起こらないよう、国民も国も協力し、努力しなければなりません。

今回のオンラインによる講演でハンセン病の歴史やその当時の人々についてより深く知ることができました。ハンセン病についての出来事をただその様なことがあったんだという知識だけで終わらせてしまうのではなく、なぜその様な事になってしまったのか経緯やハンセン病患者さんはもちろんその家族の人の心情も考えるきっかけになりました。私は今回の講演を受ける前に資料を読んで、現在の療養所の入所者数を知り驚きました。理由として書かれていた一緒に暮らせる家族がいないというものには納得していましたが差別されるというものには、すでに病気が治っているのに差別をする人がいるのか、今ハンセン病を患っていた経験がある事で差別される事はないのではないかと疑問を抱いていました。しかし、講演内で、差別をされていた過去からまた差別をされてしまうのではないかと恐怖が残っているのだと知り心に負った差別による傷はとても大きなものなのだ気付かされました。また、現在コロナウイルスの影響で患者さんや医療従事者の方々への差別が問題になっていますが、ハンセン病での教訓を改めて心に刻まなくてははいけないと思いました。この講演で今までほとんどなにも知らなかったハンセン病について様々なことを知ることができ、とても勉強になりました。また、コロナウイルスが終息した外を自由に歩くことができるようになったら実際に資料館にも出向き学びを深めたいと思います。今回は本当にありがとうございました。

今回の社会生活の授業ではオンラインでハンセン病についてのお話を大高俊一郎さんに伺った。事前にハンセン病についてのビデオを見たり、資料を読んだりしてハンセン病によってうまれた差別の歴史について既に少し学んでいたが今回の授業ではより悲惨で信じられないハンセン病による差別や偏見について詳しく知ることができた。一生療養所から出られず、病人の身であるのに働かせられ、周りの人々からは非難、差別される。断種や中絶手術を受けなければならず結婚しても子供が持てないなどといった事実が本当に衝撃的だった。その中でも監禁室によるハンセン病患者に対する酷な仕打ちがとても印象的だった。所長の権限だけで患者を処罰し、そして勝手に監禁室に閉じ込めて粗末な食事と薄い掛け布団しか与えておらず、何十人もの患者が亡くなったと聞いたときはとても信じられなかった。それは刑務所の囚人に対する扱いどころか殺人ではないのだ

ろうか。また桜井哲夫さんのお話がとても心に残った。桜井さんは自分の子供を中絶にしなければならいだけでなく自分がその手術に立ち会い、そして真理子ちゃんが息を引き取る姿を看取らなければならいなんて本当に辛いという言葉では表せない程の思いをされたのだろう。もし、私が桜井さんの立場に置かれたなからとても耐えられなかったと思う。そしてこのような悲惨な出来事は全て人々の無知と国による間違った政策によるものであると学んだ。人々は正しい知識を持つ努力したをせずただ周りの人に流されハンセン病患者やその家族に対して差別を行い、そしてそれだけに留まらず国を正しい方向に導くべきである政府が恐ろしい伝染病であるという間違った考え方を広めて差別偏見を助長した政策をとってしまったことが患者の方々を更に苦しめる原因となったことを忘れずに未来に語り継ぎ、2度と同じような被害を出さない必要があると思った。またそれだけでなく、いざ自分がその立場となったら本当に差別を止められるのかがとても重要だと考えた。黒髪小学校事件のように口で言うだけならばどうとでもできるがいざ、自分が当事者になったときに行動に起こせるかどうかが大切だ。負の感情や周りの意見に流されずに自分で正しい知識を探そうとする試みが不可欠であると思った。今回の授業ではハンセン病についての悲惨な歴史をきいてきたが、最後にそういった辛い過去を生きてきたハンセン病患者の方々の生き方についてもお話をうかがった。厳しい境遇を生きてきた人々なので悲観的に生きてる方が多いのではないだろうかと思像していたところ、実際は現実を受け入れ、趣味などを楽しみ未来に向かって進んでいる方ばかりだった。ゲートボールや絵画、音楽などを通して社会と交流したり差別の過去を伝えたりなど様々な活動を行って生きる意味を見出していた。私はこのことにとっても感銘を受けた。どんなに辛く苦しい境遇でも卑屈になっしまわず、自分のできることに取り組み生きる意味を作り出せるような人間になりたいと思った。このような貴重なお話を教えてくださった大高俊一郎さん、本当にありがとうございました。今回学んだことを忘れずにこれからの教訓にしていきたいと思います。